

考えるべきこと、行うべきこと

(ピリピ四・八、九)

「遊学（留学）は人生を変える」は私にとっても真実であった。色々なことを色々な場所で学んだのだ。そんな私の「学舎」の一つがシンガポールの繁華街にある、少しさびれたショッピングモールの一角にある骨董店。そこで習ったことの一つは本物を見ることの大切さである。持ち込まれる様々な古物の真贋やコンディションを見極めるためには、兎にも角にも本物を見、触れることに尽きる。二七物の鑑定ポイントをいくら見つけても、それを超えるスーパーコピーが出回ればそんなものはたちまち無力化されてしまう。しかし本物を知っておれば、二七物は自ずとわかるのだ。このように考えていくと何を見るかは人生の一大事。贋物ばかりを見ていればその人生も二七モノになりかねない。

閑話休題。今朝の箇所が使徒パウロは一節から続くキリスト者として堅く立つようにとの励ましの締めくくりとして、信徒が心を留めるべきことと実行すべきことを教えている。以下その二点を学びたい。

一、心にとどめるべきこと

八節においてパウロは真実、誉れあること、正しき、清き、愛、評判の良き、徳、そして賞賛に値することを心に留めるべきだと語っているのだが、この徳目のリストはその多くを当時のギリシャ哲学の道徳思想家によつていっている。つまりパウロは当時のピリピ教会の人々がよく知っている価値観に訴えているということだ。

他方私たちキリスト者はキリスト教の真理以外の価値観を「この世のもの」として簡単に退けてしまうことがないとはいえない。しかしながら墮落したという事実はあるにせよ、この世の中でよいと思われるものは偉大にして善である神によつて造られたものなのだから、そこに一定の真理を見出すことは可能である。しかしその一定の真理とは何によつて確かめられるのだろうか。その答えはイエス・キリストである。というのもキリストのうちには神の本質が満ち溢れており、知恵と知識の宝が隠されているからである（コロサイ・一九：二・三）。だから私たちはたとく社会に巣くう罪や悪、暗さや不条理ばかりを見て嘆息し、怒りを燃やしやすいためであるが、究極の真理であるイエス・キリストのはかりに見合う、あらゆる徳目に目を合わせ、よくよくそれを考え続けていくことが何より求められているのだ。

二、行うべきこと

次に九節においてパウロは実行すべきことを挙げる。それは使徒パウロから学び、受け、聞き、見たことであるが、ピリピ書の中に見出せることを挙げるだけでも①キリストの福音にふさわしく生活すること（一・二七）、②霊的一致を保つこと（二・二）、③救いの達成に努めること（二・一二）、④主にあつていつも喜ぶこと（三・一；四・四）⑤寛容・親切であること（四・五）⑥感謝をもつて祈ること（四・六）などがある。時に英語で「伝統」を表すトラディショナルという言葉には「手から手へと渡す」という原義がある。これはキリスト教の教えを考える上で極めて示唆的である。コンピューターネットワークが高度に張り巡らされた現代、多くの人がインターネットを通じて情報を得ているのだがこれはキリスト教の知識においても例外ではないし実際に牧師もそれを情報源にしている。また情報の迅速化は流行のスパンをどんどん短くしている。

しかしながら、教会においてクリスチャンが行うべきことはやはり使徒の時代から連綿と手渡されてきたこと、すなわち祈ること、感謝すること、キリストの福音に生きるといった当たり前のことなのである。当たり前のことを当たり前に行う。これがこそキリスト者の本分なのだ。

* * *

青雲の志を抱いて盛岡から東京へ遊学した「彼」。だが行った先の授業は退屈。飽き飽きした彼は人に盗みをしたと後ろ指をさされるような自堕落な生活を送つてしまった。その後立ち直つた彼が向かったのはあの札幌農学校であった。「Boys be ambitious!」のクラーク博士はすでに帰国していたが、そこにはクラーク博士の感化を受け、キリスト者となつた上級生が彼を待ち構えていた。そのような環境の中、教授たちにも食つて掛かるという激しさから「活動家」というあだ名を付けられた「彼」はキリストに根差した「良きもの」によつて作り変えられていった。イエス・キリストを人生の主と認め、聖書に親しんだ彼はいつしか喧嘩をしている学生たちの仲裁に入り「君たち、キリストは『争つてはならない』といったではないか」といつてその場を収めるようになった。それを見たクラスメイトは「これじゃあ『活動家』はだめだ。今日から彼を『修道士』と呼ぼう」と言つたという。彼の名は新渡戸稲造、国際連盟の事務次長にもなつた文化人である。友よ、良いものに心をとめ、教えられたことを実践しよう。今日から、いやすぐに始めよう。主にあつて堅く立ち続けるために。